

■第一章―― 安土

長篠の戦から八年後の春だった。一五八三（天正十一）年の弥生十一日、桜が既に散りつつあるこの日、羽柴小一郎秀長は琵琶湖岸の安土城に居た。秀吉の実弟であり、羽柴家の重鎮と言つていい人物である。戦はそれほど得意としなかつたが、思慮深い性格から政治外交には手腕を發揮、成り上がりの身分で古参の家臣団を持たない秀吉にとって最も信頼が置ける男となつている。

秀長は安土城の本丸に向かう階段の先に青空が見えることに気がついた。一帯の建物は全て焼け落ちて、ただウグイスの声だけが良く聞こえる。黒鉄門跡の周囲には黒焦げの柱が並び、無数の屋根瓦が割れて散乱していた。信長が生きていた頃には想像もできなかつた光景だ。気がつくと隠し曲輪跡に若武者が三人立つっていた。兄、羽柴秀吉の馬回り衆である。秀長は一番背の高い男に声をかける。

「虎、兄者はどこだで」

「上様はお一人で奥に」

虎と呼ばれた若者は軽くお辞儀をしてから奥の階段を指さす。

お館（おやかた）様では無く上様と呼ばせているのか、と秀長は少し驚いた。織田家に置いては「き信長にのみ許された尊称である。兄者は本氣で天下を取る気なのだ。虎が指さす方向に進むと左右に階段があつた。左と判断して進み、広い曲輪の一つに出た。かつて織田家の上屋敷が建っていた場所だ。その奥に小柄な人影が見えた。やはり上様の屋敷跡に居たかと秀長は思う。

背後の足音に気がついた秀吉は振り向かず独り言のように呟つ。

「小一郎か」

「やはりここだったか兄者」

兄であり主君でもある秀吉なら本名の忌み名、秀長と呼んでも問題ないのだが、今でも変わらず小一郎と呼ぶ。その視線の先には大海（おうみ）と呼ばれる琵琶湖が一望できた。さざ波が風と共に広がるのが見える。晴天の下、例えようのない美しい光景だった。ゆっくりと振り返りながら、焼け野原になつた織田家上屋敷から殿主（てんしゅ）台周辺を指さし、秀吉が言う。

「見る、上様のお屋敷と殿守は全て灰になつた。あのアホウのおかげでな」

「明智の軍勢が焼いたのではないか」

「違う。三介殿よ。本能寺で変ありの報せを聞き、慌てふためき何の意味も無く自分の城に火を放ったのさ」

三介殿とは信長亡き後、織田家当主となつた織田信雄の事だ。信長の次男であり、秀吉にとつては主君筋にあたる。本来なら「ちらが上様だろう。だが秀吉は吐き捨てるように俗称である三介殿と呼んだ。

「こんなアホウに織田家を任せられると思うか。上様の御遺志は天下を獲れる者が繼がないやならねえ」

それが自分だ、という事だ。確かに秀吉は頭の回転が速く度胸もある。織田家中でもその才覚はピカイチだろう。ただし自惚れが強く他人を見下しているところがあり、さらに口が悪く手も早いチンピラ的な性格のため敵も多かった。

そんな性格の秀吉が信長にだけには心酔しており、その関係は主従というよりは教祖と信者に近かつた。このため本能寺で信長討たれる、との報を受けた時、備中高松城攻めの陣中で卒倒しかかつた。なんとか踏み止まるが、今度は近くに置いてあつた刀を掴み、いきなり織田家の使者に切りかかろうとしたのである。馬鹿を言つた、と泣きながら暴れる秀吉を秀長らが取り押さえ、無理やり寝所に押し込んで落ち着かせる騒ぎになつた。ただし一時も経たずに寝所から這い出して来ると、いつも通りの抜け目ない羽柴秀吉に戻っていたのが、いかにもこの男らしかつた。そのまま敵の毛利家との和議を素早く手配し、配下の主な武将を集め宣言した。

「丹羽（にわ）殿の四国遠征軍団が明智軍に一番近い。だが鳥合の衆だ。上様亡き後は

必ずや瓦解するだろう。よつて今すぐに動ける織田家の軍団は我らだけだ。怨敵光秀を討つ。急ぎ京の都に取つて返し上様の仇を取る。心せよ」

その後、数人の腹心にはさらに踏み込んで、

「嫡男の勘九郎信忠様も討たれた。織田家に人が無い。オレが上様の御遺志を継ぐ」

とまで打ち明けた。事実上の織田家の乗っ取り宣言である。

その言葉通りに秀吉は毛利との和議を手際よく片付け京に急行、都の西にある山崎の地で明智軍を破り弔い合戦を果たしてしまった。まるで魔術のように思えた手際の良さと行動力である。だが合戦の終わった夜、誰も居なくなつた陣中で秀吉が一人泣いているのを秀長は見た。何も言わずにただ泣いていた。織田家の乗っ取りを宣言しながら同時に主の仇を討つて涙を流す秀吉という存在は、弟である秀長にとつても不思議だった。

電光石火の行動で信長の仇を撃つた秀吉は間もなく織田家の実権を握る事に成功する。織田家の宿老は秀吉と丹羽長秀、池田恒興（つねおり）の羽柴派三人が占め、さらに織田信雄、秀吉の言う所の「三介殿」を、お飾りの織田家当主として自派に取り込んでしまつた。既に織田家の中枢は秀吉の手に落ちたと見ていい。だが織田家古参の将の多くは外様である秀吉の支配を拒否し敵対を選んだ。このため織田家は現在、内紛状態にある。秀吉が織田家の中枢にあるため敵対は謀反となるのだが、これらは織田家古参の家臣団ばかりであり、正統性の点で必ずしも不利とは言い切れなかつた。その敵対勢力の筆頭が織田家生え抜きの軍団長、柴田權六勝家だ。秀吉以外で唯一、配下の軍団兵を温存できた軍団長である。三万以上と見られるその織田家北陸方面軍の兵力は脅威だった。

さらにその勝家と組んで共に反旗を翻したのがこれも織田軍団長の一人、滝川久助一益である。ただし派遣先の関東から身一つで逃げ帰つたため軍団兵の大半を失つていたが、その少ない兵で本拠地の伊勢長島に入り複数の城で籠城戦を展開していた。織田家の軍団長にまで登り詰めた男だ。戦は下手では無い。特に籠城戦はこの男の十八番だった。このため悔れない戦力となつてゐる。さらにもう一人の信長の息子、三男である織田信孝も秀吉の敵に回つていた。ただし力が物を言う戦国の世である。敵対勢力の中で唯一最大の兵力を持つ柴田勝家を討てば、信長の残した霸権の遺産は全て秀吉の手に落ちる

だろう。その勝家が籠城する滝川救援のため本拠地の北ノ庄を出て南下、柳ヶ瀬の郷に着陣したのが二日前の事だった。報せを受けた秀吉が急ぎ織田家の本拠地である安土城に入ったのが昨日である。その配下の軍勢は今、続々と城下に集まりつつあった。



「柴田の動きはどうだで」

「当然、秀長はその点を兄に問う。

「勝家が大海の北、柳ヶ瀬に入ったのは確かだ」

大海、おうみとは琵琶湖の事である。近江とも書く。その東岸を走つて北陸に至る道、

北国街道沿いにある山中の宿場町、柳ヶ瀬に柴田軍は陣取っていた。安土城からなら約十五大里、六十キロメートルほど北で、万単位の軍勢でも三日あれば移動できる距離だ。ちなみに一里で約五百メートル、これが八里で一大里、約四キロメートルとなる。

「柴田の先鋒が着陣したのが半月以上前だ。大将が出て来るまで妙に時間がかかるな」「何かを企んでいるのかもしれないし、単に勝家が年寄りで動きが鈍いだけかもしれない。正直、今はまだよく判らねえな」

この直前まで秀吉は滝川の軍勢が籠城する伊勢一帯の城を攻めていた。その滝川の救援を名目に柴田軍の先陣が南下して来たのが半月前だ。以後しばらく動きが無かったのだが、総大将である柴田勝家がようやく着陣したのである。当然、戦の順としては反羽柴派の中で最大戦力を持つ柴田の北陸軍団殲滅が最優先となる。これを潰してしまえば、織田家中で秀吉に逆らえる者は居なくなる。このため最低限の抑えの兵を滝川の各城に置き、残りは続々と東海道を北上、安土周辺に集結しつつあった。その最初の軍議がこの朝に予定されている。織田家の副司令官である秀長としては、軍議の前に秀吉の意向を確かめて置きたかった。そのためにこの朝、兄の姿を探して安土城を歩き回っていたのである。ただし秀長がその点を問う前に、秀吉は別の話を始めた。

「ようやく誰もが知りたかったことが判るぜ」

秀長はその言葉の意味を掴みかねた。

「何の事だで」

「上様亡き後、この国最強の男は誰かという話さ。上様は別格だったからな」

秀吉の言う上様とは当然、信長の事である。

「だが既にこの世に居られぬ。ならば織田軍団長の誰かだろうよ。明智も既に亡い。滝川と丹羽殿は手持ちの兵が無い。となると残った柴田とオレのどちらかだ。勝った方が当然、天下を獲る事になるだろう」

本能寺の変の段階で、織田家には五人の軍団長があつた。一人は変を引き起こした明智

光秀であり、これは山崎の合戦で秀吉に敗れ既に亡き者となつた。残るは羽柴秀吉、丹羽長秀、柴田勝家と滝川一益の四人である。この内、丹羽だけが秀吉と組み、羽柴派の一人として織田家宿老となつた。残る二人は敵対の道を選んだ。ただし丹羽は織田軍直属の兵を信長から預かって動くことが多かつたため、自らの軍団兵は最小規模のものしか持たなかつた。よつて戦力としては羽柴、柴田の軍団の半分以下で事実上、後継者争いからは脱落している。滝川は既に見たように関東地方からの脱出でその兵力の大半を失つてしまつた。よつて、かつての兵力を維持しているのは秀吉の羽柴軍団、そして勝家の柴田軍団だけとなる。その二つがいよいよ激突しようとしているのだ。

「だが明智の軍勢を我らは既に山崎で破つとるだ」

秀長の言葉はもつともだつた。苦笑いしながら秀吉が応える。

「あの時は戦う前から明智は崩壊していたと世の中の連中は言つてやがるんだよ。勝つて当然だとな。オレらの高速進撃が勝因だと理解してねえ。速さは強さなのに誰も気がついてねえんだ」

これは必ずしも秀吉の強がりではなく事実だつた。織田家の中で羽柴軍と並ぶ最強軍団と見られていた明智軍だつたが秀吉の高速進撃を全く予期していなかつた。このため本能寺の変の後、臨戦態勢を解いて軍勢を京の都と安土城、そして明智の本拠地である坂本城に分散してしまつたのである。さらには一部を秀吉の本拠地、長浜城に向かわせるの家族の身柄を抑えようとし失敗までしていた。

当初、光秀が最も警戒していたのはむしろ北の柴田だつた。夏のこの時期なら一月前後で琵琶湖岸まで出てくると考え、兵力の多くを都の東に位置する安土城周辺に展開させてしまつてゐるのである。ところが備中高松城攻めの最中だつた秀吉が、わずか十日で西から攻め上がつて来てしまつた。光秀は慌てた。急ぎ兵を搔き集め西の要害の地、山崎で迎え撃つたがまともな準備が出来ていたとは言い難い。そもそも一部の兵は戦闘に間に合わず、その結果、一方的に蹂躪されて終わつた。まともな戦闘になる前に自滅し敗れ去つたのは半ば事実だが、それは秀吉の高速戦ゆえの結果だつた。

「とにかく世の連中が羽柴の実力を判断しかねてゐるのは確かだ。だが柴田の北陸軍団

を討てば誰もが納得するだろうよ」

「戦わずして下る連中も増えるだか」

「そういう事だ」

「それでこの戦、どうするだで」

「数で押し潰す」

「数だか」

「そうだ。多勢に無勢だ。単純に正面からぶつかる、そのまま兵力差で押しつぶす」

「抑えとして伊勢長島に一万の兵を置いて来てしまったで軍勢は五万を切つとるぞ」「なに、問題ねえ。まず佐々成政は勝家とも又左とも馬が合わず、孤立していたから北陸で上杉の抑えに置いて来たはずだ。金森もまた地元に残つたらしい。よって連中には三万前後の兵しかねえだろう。押し切れる」

又左とは織田軍団の中でも猛将の一人として知られる前田利家の事だ。秀吉にとって最も親しい友人と言つていい男だったが、今は柴田勝家の配下にあり、その軍団と共に南下して来ていた。

「柴田の軍勢には又左が居やがる。出来る限り単純明快に行くぜ」

本心だろう。敵に回った前田利家の戦上手は織田家の人間なら誰もが知っていた。手も足も出させぬまま押しつぶせるなら、それに越したことは無いのだ。そもそも柴田が最後の敵ではない。まだまだ日本中に敵が居る。西の毛利、東の徳川は今のところ様子見を決めているが、この戦で羽柴の軍勢が大きく損なわれたとなれば、どう動くか判つたものでは無い。それでは勝つても意味が無い。可能な限り損失を避けて、一気に押しつぶす必要がある。冒険は出来ないだろう。秀吉が言葉を続ける。

「小六（ころく）と官兵衛も姫路から今朝到着した。この戦、さつさと片づけちまうぞ」

弟である秀長を別にすれば、秀吉が最も信頼しているのがこの二人だった。小六と呼ばれた蜂須賀小六正勝は最古参の家臣の一人で、秀吉より十近く年上の古強者である。

元々は信長配下だったが、秀吉を補佐監視する与力の一人として派遣され、後に秀吉が織田家の軍団長になると請われてその直参となつた。戦の駆け引きと度胸でここまで出世した人物だったが、秀吉の下で働く内に政治外交まで出来るようになつてゐる。秀吉との付き合いは既に二十年近く、その信頼は極めて厚い。

もう一人の官兵衛とは黒田官兵衛孝高（かんべえよしたか）の事である。「ちらは八年ほど前、織田信長が中国地方への進出を田論み、一帯に秀吉を派遣した時に縁が出来た。これも織田家の配下に入り与力として派遣され秀吉の下にあつたのだが、本能寺の変で信長が斃れるとそのまま羽柴家に迎えられている。戦も政治も外交も出来る万能と言つていい男で、秀吉はそのまま買つていた。このため既に秀長、蜂須賀に次いで三人目の羽柴家の宿老にまで抜擢されている。この二人は毛利を牽制するため西の最前線、姫路城に置かれていたのだが、柴田相手の決戦に不可欠な人材として急ぎ安土まで呼び出されたのである。一通り話終わった秀吉は曲輪奥の石段に向かって歩き始めた。相變わらず脚が速い。すぐにその姿は階段の先に消え、ただ声だけが響く。

「先に行く。小一郎、朝の軍議には遅れるなよ」